

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月31日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720221

研究課題名（和文） 近世後期地域社会における出羽三山修験の活動と心縁結合の特質に関する研究

研究課題名（英文） A Research of *Dewasanzan shugens'* Activities and Local Associations in the Later Early Modern

研究代表者

山澤 学（YAMASAWA MANABU）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：60361292

研究成果の概要（和文）：出羽三山は、山形県庄内地方に所在し、修験（山伏）が活動した霊山である。本研究は18世紀後半～19世紀前半に、出羽三山修験の布教によってその信仰が地域社会に浸透・定着する過程とその特質を解明することを目的とした。とくに、庄内出身の湯殿山行人である鐵門海が布教した方法、および、その信仰の受容により表出する地域社会の結合形態を個別具体的に解明するとともに、日本近代の個人と共同体のあり方を展望した。

研究成果の概要（英文）：*Dewasanzan* is the range of sacred mountains in *Shonai* (a part of *Yamagata*), and the school of training of *shugen* or *yamabushi* (mountain priest). The purpose of this study is to demonstrate the process and the peculiarity of *Dewasanzan* worship led by *shugens'* activities. This research examines the role of *Tetsumonkai* who is the original *shugen* of Mt. *Yudono* from the 18th to the 19th century. It concludes that citizens and associations of modern Japan was founded in the Edo period, clarifying how *shugens* were accepted by local associations in East Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総 計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：宗教社会史、歴史民俗学、修験道、共同体論

## 1. 研究開始当初の背景

修験道とその信仰は、日本の社会と文化の基層をとらえるために、日本史学というよりはむしろ、日本民俗学・宗教学・文化人類学・歴史地理学において主に研究対象とされてきた。山形県に所在する出羽三山（羽黒山・湯殿山・月山）の修験道とその東日本に広が

る信仰にかんする研究は、その代表的事例の一つであり、第二次世界大戦以降、とくに1980年代以降に前進した。

教団形成および檀那場など基礎的考察を行い、『新版出羽三山修験道の研究』（佼成出版社、1986年）に結実した戸川安章をはじめ、檀那場の特質を明らかにした堀一郎「羽黒を

中心とする『霞』の組織』（『我が国民間信仰史の研究』2、東京創元社、1953年）、羽黒派（羽黒修験）と呼ばれる、羽黒山を本山とする末派修験の東北地方における展開を究明した森毅『修験道霞職の史的研究』（名著出版、1989年）、羽黒山一山の儀礼構造を解明した宮家準『羽黒修験』（岩田書院、2000年）、湯殿山に固有される特徴的な信仰である即身仏信仰を解明した堀一郎「湯殿山系の即身仏（ミイラ）とその背景」（『宗教・習俗の生活規制』、未来社、1963年）、内藤正敏『日本のミイラ信仰』（法蔵館、1999年）、信仰圏を地理的分布・参詣記録解析を通じ解明した岩鼻通明の一連の著作、なかんずく『出羽三山信仰の圏構造』（岩田書院、2003年）、羽黒山秋峰の個別研究で、北村皆雄監督による記録映像『修験羽黒山秋峰』（ヴィジュアルフォークロア、2005年）をともなう島津弘海・北村皆雄編『千年の修験 羽黒山伏の世界』（新宿書房、2005年）など、少なからぬ研究蓄積がある。

江戸時代の修験道については、下野国（栃木県）日光山および紀伊国（和歌山県）熊野の修験道を検討した拙稿「修験勢力のひろがり」（『鹿沼市史』通史編原始・古代・中世、鹿沼市 2004 年）において指摘したように、修験道の全盛期である中世の後史、あるいは停滞期とされてきた。出羽三山修験道とその信仰もその範疇に洩れない。先行研究においては出羽三山の本山としての機能に注目が集まり、また、東北地方に残る信仰から解かれてきた。しかし、東北地方における信仰の場合、出羽三山膝下にあるためにその影響の強さから劇的な変化は見受けられず、一面的な現象のみに固執することにより、停滞と映りやすい傾向にある。

しかし、公表済みの拙稿および 2007～2008 年度に若手研究（B）に採択された研究課題「出羽三山修験道の在地浸透とその特質に関する研究」（以下、前研究課題と略記する）の成果論文でも指摘したように、江戸時代の出羽三山信仰圏の縁辺部に当たる信越地方（長野県・新潟県）において、修験・信仰は民間社会の変動に対応し、また、他の修験道・宗教との競合による劇的な転換を果たしたことを看取できる。その信仰は村内鎮守の祭礼その他の地縁・族縁集団の信仰・年中行事など生活文化のうえにも大きな影響を現に残し、地域に固有の文化の基層を形づくっており、この点において、地域社会が日本近現代に至る過程を展望をしうる可能性がある。修験道、なかんずく出羽三山修験道については、かかる巨視的な視野をもちつつ、微視的に個別具体相を探る基礎研究が必要である。

後述するように、本研究初年度の 2009 年は 12 年に一度の丑年で、湯殿山の御縁年に

あたる。通常は非公開の史料が開帳され、実見ならびに複製の収集が容易になる。本研究課題を、2009 年度から開始したことは時宜に適うものでもあった。

## 2. 研究の目的

本研究では、上記「研究開始当初の背景」をふまえ、出羽三山の修験道とその信仰が 18 世紀後半から 19 世紀前半に在地へ浸透・定着する特徴を、本山たる出羽三山のうち湯殿山と、信仰圏の中心にある庄内（山形県）および縁辺部にある関東・信越地方の地域社会の信仰に基づく社会結合の個別具体相から究明することを課題とした。かかる社会結合を表現する語彙に、仏教語としては「結縁」がある。本研究課題では、仏教のみならず、さまざまな宗教や思想の上での共鳴、経済活動上での相互保証などによって協力同心する社会結合を、心縁結合と表現することにする。すなわち、その背景には、協力同心する個人の意志が存在することが前提となり、彼らこそが日本近代の主体へとつながることを予測するのである。

出羽三山修験道とその信仰の本質は、本山の教学・本末編成などからの検討で一応解明できることについては否定しないが、その内実に肉薄していくためには、単に本山である出羽三山とその膝下の東北地方を取り上げるのではなく、その信仰圏縁辺部に形づくられた地域社会を取り上げ、三山およびその膝下の地域社会の動向と対比しつつ、信仰の浸透を図る布教の特徴と、これを受け入れた在地の地域社会の状況を解明することが有効である。

出羽三山修験道とその信仰の歴史的展開と特質の究明は、前掲岩鼻『出羽三山信仰の圏構造』が指摘した出羽三山修験道の信仰圏の縁辺部にあり、他の信仰との衝突がある関東の各都県、長野県、新潟県における地域社会の構造分析と、本山側およびその膝下の庄内地域の動向とを連関させつつ、検討することにより達成できると考える。

## 3. 研究の方法

本研究では、出羽三山の修験道とその信仰が江戸時代、在地に浸透・定着する構造的特質を、出羽三山のうちとくに湯殿山に着眼し、信仰圏の中心にある庄内および縁辺部にある関東・信越地方の地域社会における信仰に基づく心縁結合の個別具体相から究明する。それは、日本近代への展望をも目指すものでもある。そのために、①18 世紀後半～19 世紀前半、出羽三山の一つである湯殿山の別当・行人を中心とする信仰普及活動の解明、②出羽三山信仰圏の縁辺部にあたる関東・信越地方の地域社会の信仰に基づく心縁結合

の個別具体相の解明、以上2点の解明を目指すことにした。

具体的には、以下の方法を採用した。

(1) 研究の中心的事例として、出羽三山の一つである湯殿山の行人で、湯殿山山籠木食行者と初めて自称した鐵門海の活動を取り上げた。鐵門海は、前研究課題の成果においても指摘したように、出羽三山でもっとも著名な修験であり、しかも信仰普及活動をさかんに行った。東日本各地の地域社会に数多くの信者を獲得し、新たな講中を結集させるなど、特徴的な活動をおこない、没後200年を経た現在にも彼を慕う信者が存在している。したがって、特殊・個別的ではあるが、他に代えがたい、貴重かつ重要な事例として位置づけることができる。

(2) 史料は、鐵門海の活動にかんする研究が従来依拠してきた縁起・伝記史料のような後年の編纂物ではなく、同時代の史料を極力悉皆収集して分析した。とくに、本研究課題初年度にあたる2009年は湯殿山の丑年御縁年であり、鐵門海が没した寺院である山形県酒田市日吉町2丁目の海向寺所蔵史料が数多く開帳され、予想を上回る情報収集が可能になった。実際に、同寺に残る勸化帳を含む文献史料はもちろん、従来の日本史学研究者が研究対象外としてきた版本や什物の調査・撮影を行い、史料化を進めた。また、前研究課題で検討した関東・信越地域の地方史料についても引き続き博搜し、研究遂行上、万全を期すことができた。

#### 4. 研究成果

(1) 湯殿山山籠木食行者鐵門海が越後国岩船郡（新潟県村上市）における新興勢力の台頭などの在地社会の変質をとらえ、従来の信仰普及活動に対する内省をふまえて教学を再編し、即身仏信仰を確立し、かつ即物的・直接的で平易に地域社会における新興勢力、とくに個人の救済を説いて布教する革新的な行動をとっていたことを解明し、論文②によって公表した。この論文は、直接的には前研究課題の成果で、本研究課題の前提となるものであるが、その公表にあたっては、当補助金の一部を使用して得た新たな知見も加筆した。

(2) 研究初年度には成果(1)をふまえ、鐵門海が住持し、没した寺院である出羽国庄内酒田の海向寺が現代まで伝えてきた5冊の奉加帳、および100枚を超える札の版本の現地調査を重点的に実施した。これらは、湯殿山の御縁年にあわせて同寺で特別開帳されたため、調査が可能になったものである。これらは鐵門海とその門弟が近世後期から近代にかけて信仰普及を行った実態を示す史料にほかならず、先行研究が鐵門海らを従來說くさいに重きを置いてきた縁起史料上の存在

形態とは異質な実態を解明できる手がかりとして重要である。札の版本の残存量も、地方寺院の所蔵としては稀有の数量といえ、これらを検出できたこと自体が貴重な成果である。従来等閑視されてきた札の版本を史料化し、またその史料論を確立することは、本研究課題である修験の活動と地域社会における心縁結合のあり方を検討するのに有益であるばかりでなく、今後の宗教社会史研究にも裨益するものと考えられる。

(3) 成果(2)にあげた酒田の海向寺が所蔵する勸化帳のなかで、とくに文化7年(1810)正月起筆の「海向寺本堂再建寄附帳」（以下、「寄附帳」と略記する）は、鐵門海の自筆署名による序を載せる新出史料である。この「寄附帳」に表出する社会結合形態を考察、検討した。

その結果、鐵門海が、18世紀後半から19世紀前半の酒田における生活・生業の拡がりを背景として、東北から江戸・越後まで広域的に布教し、また、町・村・同業者仲間などの諸団体、肝煎・大組頭など村役人層、および女性や新興勢力を含む個人など多種多様な主体を結縁させたこと、とくに時代を象徴する個としての新興勢力との結縁は、既成の修験とは異なっており、木食行者による新たな出羽三山信仰を喧伝することによるもので、それこそが近代・現代のいわゆる出羽三山信仰の基礎に外ならないこと、さらには鐵門海と結縁した地域社会における心縁結合は、鐵門海の跡を継いだ門弟の時代以降、庄内川北を中心に収斂されるが、これこそが近代における酒田を中心とした庄内川北地域であったこと、以上の3点を指摘し、日本近代の主体たる個人が近世後期の地域社会に析出され、その心縁結合がその地域社会のあり方そのものを表出させたものであったことを実証的に解明した。

この成果は学会発表①により公表し、庄内在住の地域史研究者を多数含む参加者と討議することにより、さらに深めることができた。この討議をふまえた成果論文も投稿中である。また、学界から求められている、海向寺所蔵の新出史料を中心とした史料集の原稿も完成しているが、個人情報取り扱いに慎重を期し、史料所蔵者および関係者の校閲を受けているため、印刷を見合わせている。校閲後にその許諾が得られ次第、公刊したい。

なお、本成果の一部は、2012年2月18日に海向寺主催の講演会「海向寺にいたころの鐵門海—勸化を中心に—」（約300名参加）において講演し、調査地域への社会還元を果たした。

(4) 以上のような鐵門海を中心とする出羽三山修験の実証研究を相対化する試みとして、関東・信越地方のうち下野国（栃木県）・上野国（群馬県）・常陸国（茨城県）・信濃国

(長野県)における出羽三山修験の事例、さらにはこれらの地域に出羽三山修験と同じく接近、布教した信濃国戸隠修験や山城国(京都府)伏見稲荷、江戸(東京都)愛宕山の信仰普及の事例などもあわせて収集して検討した。普及の範囲や普及にあたった修験その他の宗教者の傾向は、予想通り鐵門海の場合と近似している。しかし、鐵門海ほどの独創的な布教活動を見出すには至っておらず、鐵門海が特徴的な事例であることを改めて確認できた。

とくに17世紀から19世紀に及ぶ下野国日光における地域社会において、愛宕山や伏見稲荷などの新しい外来の信仰が地域社会における各時代の新興勢力によって取り込まれ、定着したことを考察、解明した成果は、論文①によって公表した。

なお、論文①の内容は、民間団体である日光鉢石宿のおひなさま実行委員会が栃木県日光市・日光観光協会などの後援を受けて日光市日光郷土センターで平成23年2月19日に開催した講演会において「日光の稲荷と初午」(約50名参加)と題して講演し、社会還元を果たした。

(5) 関東・信越各地に勧請された湯殿山のうち、本研究課題が対象とする時代に信仰登山されたものの一つに下野国日光山(栃木県日光市)の湯殿山がある。これは、寛永年間(1624~44)に伝播、定着したもので、その定着に寄与した日光東照宮別所大楽院の事績を解明した論文を副産することができた。これまで未紹介であった大楽院伝記史料の翻刻を添えた当論文は印刷中(著者責了)で、近日中に公刊される予定である。

(6) 残された課題として、鐵門海が地域社会に心縁結合を構築したさいに各地で協力した者の存在形態と、彼らへ鐵門海が接近した方法、すなわち鐵門海を取り巻く情報ネットワークのあり方は、日本近代をより確かに見通す上でもいっそう具体的に解明しなければならないと考えている。また、鐵門海の布教した地域は、東日本大震災で大きな被害を受けた東北地方太平洋岸にも及んでおり、これらの地域社会における心縁結合のあり方は、現今の情勢をふまえれば等閑視できず、検討対象とされなければなるまい。今後は、これらに取り組みつつ、前研究課題と本研究課題を総括する著書をまとめ、公刊するべく、さらなる研究の前進に努めたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 山澤 学、「近世日光の稲荷」、『朱』、査読無、54号、2011、106-119
- ② 山澤 学、「19世紀初頭出羽三山修験の覚醒運動：湯殿山・木食行者鐵門海の越後布教を中心に一」、『社会文化史学』、査

読有、52号、2009、75-94、  
URL:<http://ci.nii.ac.jp/naid/40016717976>

〔学会発表〕(計1件)

- ① 山澤 学、「湯殿山山籠木食行者鐵門海の勧化における結縁の形態 —酒田海向寺住持期を中心に—」、地方史研究協議会2011年度第62回(庄内)大会、2011年11月15日、鶴岡市中央公民館市民ホール(山形県鶴岡市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山澤 学 (YAMASAWA MANABU)  
筑波大学・人文社会系・准教授  
研究者番号：60361292